

ウランバートル市における障害者の社会参加促進プロジェクト（JICA/DPUB）

ニュースレター第29号 2019.08

沖縄研修へ出発！タミルフーさん (2019.08.25)



介助者のゲセルさんと一緒に

2015年に事故で頸椎損傷を負ったタミルフーさん。脇から下の感覚がなくなり、車椅子を利用するようになりました。肩と肘は動きますが、両指が動かさなくなりました。元々は環境分野のエンジニア。モンゴル国立大学で、大気汚染や水質、土壌等の環境科学を専攻し、タイで修士号を取得。帰国後、企業で鉱物資源の分析の仕事をしていましたが、事故に遭って会社を退職。しばらく家で過ごしていました。親戚から自立生活センターを紹介され、「ずっと家にいるよりは・・・」と思い、訪ねてみました。頸椎損傷の利用者6,7名と会い、お互いの障害のことについて話しまし

た。今振り返ると、あれはピアカウンセリングでしたね。当時は横になった状態で車椅子を利用していましたが、仲間が座っていたことが印象的でした。

2018年11月に自立生活センターの職員になりました。主な担当は障害児教育。最近、ある脳性マヒを持つ人の家を訪問しました。車椅子の提供が目的でしたが、「家から出たくないの、他の人にあげて下さい」と断られました。ずっと家にいて、学校にも通っていない人でした。こうした人はモンゴルにまだたくさんいるはず。周囲に迷惑をかけたくないのか、本人が出たくないのか・・・原因はわかりませんが、どうしたら考えを変えられるだろうか？外国ではどのように取り組んでいるだろうか？

今年8月に、JICA沖縄で障害者の自立生活やエンパワメントについて学ぶ研修に参加することになりました。介助者も一緒なので不安はありません。障害分野は私にとって新しい分野。英語力を活かして、日本だけでなく他国の経験も学びたいと思います。「教育は、未来への扉。障害のある子ども達の学びを支援できるようになりたい！」タミルフーさんの夢です。

障害平等研修（DET）は効果があるのか？ (2019.08.30)

DETは、2017年2月に本格始動し、ウランバートル市内を中心に、2019年6月末で実施回数が262回、のべ参加者が8,381名を超えています。DETは、障害の社会モデルに基づく視点の獲得と行動の形成を目的としており、そのような開催実績を通じて様々な影響やインパクトが出ている、と期待しています。しかしながら、他の研修やセミナーもそうですが、DETの効果やインパクトの実態を明らかにすることは容易ではありません。たとえば、DETを通じて参加者の意識が変わり、実社会や組織の中で行動していくことが期待されますが、それは参加者を取り巻く環境などによって大きく異なってくることが想定されるからです。そのような複雑さを踏まえつつ、DPUBは障害者開発庁からの協力も得ながら、DETの評価を行います。主に半構造化面接（semi-structured interview）という手法を用いて、DET受講経験がある人や組織に聞き取り調査を行っていきます。8月には調査員の養成などの準備を行いました。9月から本格的に評価を実施していきます。結果が明らかになり次第、皆様にも共有・報告させていただきたいと考えています。



聞き取り調査の様子

日本の映画「どんぐりの家」の上映会

(2019.08.28)

先日、新モンゴル高等学校で日本の映画「どんぐりの家」の上映会がありました。この映画は、聴覚障害と知的障害を併せ持つ重複障害児のお話で、1970年代から1990年代の日本の障害児・者の現状についても理解できる作品です。新モンゴル学校の卒業生グループがモンゴル語の字幕をつけてくれたので、モンゴルの方もご覧頂けます。障害児を育てる両親の生々しい現実や苦労、それら乗り越えて生きる意味を見出す障害児自身と両親、障害児・者を受け入れる社会の変化など、様々なものが描かれていて、見る人によって感じ方も大きく変わると思いました。モンゴルにも特別支援学校や学級があり、また知的障害児にデイサービスを提供する民間団体が存在します。これらの教育制度や支援制度もまだ十分とは言えませんが、同時に成人した障害者の受け入れ先が少ないことも大きな課題となっています。この課題を解決していく過程が「どんぐりの家」には描かれており、現在のモンゴルと通じる課題も多いと思いました。ぜひこの作品を多くの方にご覧頂きたいです。



JICA DPUBのFACEBOOKページに

「いいね」をお願いします。

おかげさまで、今ではページの「いいね」が5405件に達し、より多くの方に情報を発信できるようになりました。これからも、楽しんでいただけるような投稿を目指して頑張ります。引き続き、宜しくお願い致します。

情報技術と障害



千葉チーフアドバイザー

情報アクセシビリティや情報技術研修の実施、24カ国の障害国別情報のウェブサイトへの掲載など、APCDは多くの成果を上げてきました。他方、その裏には様々な苦労もありました。その一つは、情報技術に対する社会の理解不足です。現在、パソコンだけでなく、スマホやタブレットなど、インターネットは生活の一部として欠かせない存在になりました。でも、2000年代前半は、途上国ではネットもそれほど普及しておらず、スマホもありませんでした。そんな時、障害者にも情報技術が必要だ！と訴えても、多くの人には理解されませんでした。「情報技術も大切だが、途上国にはまだ早い。他に重要な課題がある」、行く先々で言われた言葉です。確かに他の課題も重要です。ただ情報技術は今後ますます発展するし、何より情報技術によって障害者の生活が飛躍的に変わると信じていた私にとって、周りの反応はそっけないものでした。でも、そんな私を支えてくれたのは、障害者の人達でした。特に視覚障害者の人たちは、情報技術の可能性に早くから着目しており、「この技術が必要だ」という強い信念を持っていました。彼らと一緒に活動したことは、自分にとって大きな財産になりました。

DPUB連絡先

Office: Government Building – 2, United Nation's Street – 5, Ministry of Labor and Social Protection Ulaanbaatar – 15160, Mongolia

Facebook: <https://www.facebook.com/jicadpub>

Website: <https://www.jica.go.jp/project/mongolia/015/index.html>

E-mail: dpub.jica@gmail.com